

藤田記念医学研究振興基金研究助成事業
終了記念誌

藤田記念医学研究振興基金研究助成 事業終了に寄せて



杉野 剛

独立行政法人日本学術振興会 理事長

日本学術振興会では、学術研究の助成、研究者養成のための資金の支給、学術に関する国際交流の促進、その他、学術の振興に関する事業を実施しており、藤田記念医学研究振興事業も、その1つに数えられます。

本事業の歴史は大変古く、昭和62（1987）年度に、故藤田 登 元神戸医科大学教授のご遺族からの寄附金（約1億2,000万円）を原資として設置された基金により、若手研究者を対象に、医学分野の主として外科系医学に係る研究を助成する事業を開始したのが始まりです。その後、令和4（2022）年度まで、35年の長きにわたり、合計180件の研究助成を行ってまいりましたが、本年度をもって終了する運びとなりました。

本事業については、これまで、藤田先生のご遺族はもとより、故高久史磨先生を委員長とする藤田記念医学研究振興基金運営委員会の先生方など、多くの方々のご理解とご協力によって支えられてまいりました。特に、委員会の先生方におかれましては、大変お忙しい中、助成対象となる研究課題を選定いただくなど多大なご尽力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

本記念誌の作成に当たっては、藤田先生のご遺族や委員会の先生方などの関係者のほか、かつて本事業により研究助成を受けた方々からも玉稿をお寄せいただきました。当時は新進気鋭の若手研究者であった先生方も、現在では、我が国の医療、並びに医学研究を支える中心的な役割を果たしておられます。本事業を通じ、このような方々の研究を支援できたことは日本学術振興会としても大変光栄に存じます。

最後に、藤田先生のご遺族のご厚意に対し、重ねて御礼申し上げるとともに、本記念誌の発行により、故藤田 登先生のご功績を記録に留めることができたことに感謝申し上げます。

藤田登先生の御略歴

略歴

| | |
|------------|-------------------------------|
| 明治33年1月31日 | 香川県に生まれる |
| 大正11年5月 | 京都府立医学専門学校(現在の京都府立医科大学) 卒業 |
| 昭和5年7月 | 医学博士(空腸曠置の臨床的並びに実験的研究) |
| 昭和61年5月28日 | 御逝去 |



職歴

| | |
|----------|--|
| 大正11年7月 | 京都府立医学専門学校附属病院 鈴木外科医院 |
| 大正13年9月 | 京都府立医科大学 助手 |
| 昭和2年9月 | 京都府立医科大学 講師 |
| 昭和5年12月 | 京都府立医科大学 助教授 |
| 昭和6年4月 | 兵庫県立神戸病院 外科副部長 |
| 昭和8年4月 | 兵庫県立神戸病院 整形外科部長 |
| 昭和20年3月 | 兵庫県立医学専門学校(現在の神戸大学) 第一外科兼整形外科部長 |
| 昭和22年8月 | 兵庫県立医科大学教授兼医学専門学校 教授 |
| 昭和27年2月 | 神戸医科大学教授 神戸医科大学附属病院 第一外科部長 |
| 昭和32年4月 | 神戸医科大学附属病院院長・兵庫県病院協会会長 |
| 昭和33年9月 | 神戸西ライオンズクラブ 初代会長 |
| 昭和39年7月 | 労働福祉事業団神戸労災病院 院長兼任 ライオンズクラブ国際協会三三五-A/335-A地区 DDG 就任 |
| 昭和39年10月 | 神戸医科大学教授 退任 |
| 昭和40年3月 | 神戸医科大学名誉教授 労働福祉事業団神戸労災病院院長 |
| 昭和50年2月 | 神戸労災病院 名誉院長 |
| 昭和50年5月 | 兵庫県病院協会 名誉会長 |

表彰

| | |
|----------|-----------|
| 昭和45年11月 | 勲二等 旭日中綬賞 |
| 昭和61年6月 | 従四位綬章 |

関係学会役員歴

| | | |
|------------|-------------|-------------|
| 日本外科学会特別会員 | 日本消化器病学会評議員 | 日本小児外科学会評議員 |
| 日本癌治療学会評議員 | 日本臨床外科医学評議員 | 近畿外科学会会長 |
| 兵庫県全外科医会会長 | 日本輸血学会会長 | 日本災害外科会会長 |

| | |
|---|-----------|
| 1. 藤田記念医学研究振興基金研究助成事業の歴史を振り返る | 5 |
| 藤田記念医学研究振興基金運営の軌跡 高久 史磨（公益社団法人地域医療振興協会 会長） | 6 |
| 藤田記念医学研究振興基金創設を振り返って 藤田 裕（親族代表(孫)） | 7 |
| 歴代の藤田記念医学研究振興基金研究助成事業委員 | 8 |
| 2. 藤田記念医学研究振興基金研究助成を受けて | 9 |
| 藤田記念医学研究振興基金研究助成事業終了への思い 宮島 伸宜（日本大腸肛門病学会 理事長） | 10 |
| 私の研究へのモチベーションを高めてくれた藤田記念医学研究振興基金 橋爪 誠（北九州古賀病院 院長） | 11 |
| 藤田記念医学研究振興基金による研究成果とその後の展開 —これまでの外科系医学研究者としての歩みと今後の課題について— 阪倉 長平（地方独立行政法人 明石市立市民病院 病院長） | 13 |
| 日本学術振興会藤田記念医学研究振興基金の研究助成を頂いて 田中 真二（東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 分子腫瘍医学 教授） | 15 |
| 3. 藤田記念医学研究振興基金研究助成の実績 | 17 |
| 藤田記念医学研究振興基金の助成推移 | 18 |
| 藤田記念医学研究振興基金研究助成一覧 | 19 |

1

藤田記念医学研究振興基金研究助成事業の 歴史を振り返る

藤田記念医学研究振興基金運営の軌跡



高久 史 磨

藤田記念医学研究振興基金研究助成事業委員長
公益社団法人地域医療振興協会 会長

藤田記念医学研究振興基金研究助成事業（以下、「本事業」という。）が開始された当時は、まだ若手研究者に対する研究助成は現在ほど充実していませんでした。そのような状況の中で、昭和62（1987）年度に故藤田登先生のご意向を踏まえ、ご遺族から寄せられた寄付金約1億2千万円により、日本学術振興会に藤田記念医学研究振興基金（以下、「基金」という。）が設置されました。そして、昭和63（1988）年度から、医学分野のうち主として外科系医学の若手研究者を対象として、本事業が開始されました。

私は、昭和62（1987）年度に藤田記念医学研究振興基金運営委員会（以下、「委員会」という。）が発足した時から本基金の運営に携わってきました。委員会には私を含め17名の委員が携わってこられました。私は平成14（2002）年から委員長として、委員会の会務を掌理して参りましたが、委員の中には、病院で患者の生命と向き合う第一線で奮闘されておられる医師も多く、そのような多忙な本務と重なる中で基金の運営のためにご尽力くださったことはたいへんありがたいことでした。

また、基金を通して、多くの優秀な若手がチャレンジな研究のチャンスに恵まれたことを嬉しく思っております。基金終了となる令和4（2022）年度までに基金の助成を受けた研究者は180名にのぼります。助成を受けた研究者が、今後も日本の医学・医療の発展のために尽くされていくことを願ってやみません。

「自分が今のポジションに就けたのは、若いときに自分をピックアップしてくれた人がいたから。だから私の使命は若い優秀な人を見つけてチャンスを与えること。それが私の恩師に対する最大の恩返しだ。」これは、私が若い頃にアメリカへ留学した際に師事した教授の言葉です。優秀な若手研究者にチャンスを提供するという意味でも、基金による研究助成が果たした役割は次世代へと連綿と繋がるようなものであったといえるのではないのでしょうか。

長きにわたり一緒に基金の運営にご協力いただいた皆様に御礼を申し上げますとともに、若手研究者支援のさらなる充実及び今後の学術研究、とりわけ医学研究のより一層の発展を祈念いたしまして、本事業終了にあたっての私の挨拶といたします。

高久史磨委員長におかれましては、令和4（2022）年3月24日にご逝去されました。

高久委員長は、34年にわたり藤田記念医学研究振興基金運営委員会委員および委員長を務められ、藤田記念医学研究振興基金の運営に多大なるご貢献をいただきました。

挨拶文につきましては、生前に既にいただいていたものを校正の上、掲載しております。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

藤田記念医学研究振興基金創設を振り返って

藤田 裕

| 親族代表(孫)

祖父 登 (のぼる) は 1900 年 1 月 31 日、現在の香川県三豊市で農家の長男として生まれました。医学を志し、1917 年に京都府立医学専門学校 (現在の京都府立医科大学) に入学しました。学生時代は、登山、スキー、乗馬など活発にスポーツ活動をしていました。縁あって神戸に異動後は、外科学、とりわけ消化器外科、整形外科を専門に診療していた、と聞いております。非常に手術がうまかった、と聞いておりますが、特筆すべき業績として 1949 年の「腹部圧診点 S.P の確立」があります。1970 年には「勲二等旭日中綬章」を叙勲しました。また、1975 年には「浮き (憂き) を見つめて 45 年」を執筆し、趣味の釣りとは本業の外科学を融合させた人生訓を綴りました。その後 1983 年には兵庫県釣り連盟会長に就任しました。

私が医学部在籍中の敬老の日、祖父 登は神戸港に釣りに出かけテトラポットで足を滑らせ、頸椎・頸髄損傷のため四肢麻痺となりました。1986 年 5 月 28 日、看護の甲斐なく 86 歳で亡くなりました。遺産の用途について協議する中で祖父登の長男である稠清 (しげきよ) による「父 登は教育者でもあったから、若手の外科系研究者の助成を望んでいた」の発議で、自身の博士論文の指導者、須田勇教授と相談しました。須田教授はさっそく日本学術振興会に、「1.2 億円を寄付するので、若手の研究者を助成する基金を作ってほしい」と申し込みました。1986 年 11 月 5 日に須田教授、稠清、昌英 (次男) の 3 名が日本学術振興会の関係者と話しあった結果、日本学術振興会に「藤田記念医学研究振興基金」を設けて、毎年数名の若手の外科学研究者に 100 万円程度ずつ助成する、という骨子案の合意に至りました。

ちょうど私が医師となった 1987 年度から藤田記念医学研究振興基金として、外科系医学における研究を助成する事業が始まりました。遺族側委員は稠清と昌英が 3 年毎に交代し、2011 年からは孫の世代の私、裕 (ひろし) へ、さらには 2016 年

からは坂本攝にも引き継がれてきました。藤田記念医学研究振興基金は、科研費 (若手研究) を終了した方に助成を行ってきましたが、「祖父、登が一流の臨床医であった」ことを鑑み、2017 年度より、災害拠点病院において臨床研究を行っている方にも助成の道を開くことができました。

低金利時代が続き、原資が年々減少したため、基金発足 35 年を経てここに終了することとなりました。お彼岸中の昨日 (2022 年 3 月 21 日) 墓前に基金終了の報告に行き参りました。今後も日本の臨床・基礎研究、取り分け外科系分野から多くの優れた研究が世界に向けて発信され続けていくことを藤田家一同、祈念しております。

2022 年 3 月 22 日



手術に励んだ多忙な日々



思索を深める機会となった釣り

歴代の藤田記念医学研究振興基金研究助成事業委員

須田 勇

所属・役職 | 姫路獨協大学 学長
任期 | 委員長 S62.9.1 ~ H11.8.31

竹内 一夫

所属・役職 | 杏林大学 医学部長
任期 | 委員 S62.9.1 ~ H11.8.31
委員長 H11.9.1 ~ H14.8.31

高久 史磨

所属・役職 | 東京大学 教授
任期 | 委員 S62.9.1 ~ H14.8.31
委員長 H14.9.1 ~ R4.3.24

松本 圭史

所属・役職 | 大阪大学 教授
任期 | 委員 S62.9.1 ~ H23.8.31

藤田 稠清

所属・役職 | 兵庫県立姫路循環器病センター 副院長
任期 | 委員 S62.9.1 ~ H2.8.31
H5.9.1 ~ H8.8.31
H11.9.1 ~ H14.8.31
H17.9.1 ~ H20.8.31

藤田 昌英

所属・役職 | 大阪大学 講師
任期 | 委員 H2.9.1 ~ H5.8.31
H8.9.1 ~ H11.8.31
H14.9.1 ~ H17.8.31
H20.9.1 ~ H23.8.31

三輪 史朗

所属・役職 | 日本学術振興会 理事
任期 | 委員 H2.9.1 ~ H17.8.31

武藤 徹一郎

所属・役職 | (財)癌研究会附属病院 副院長
任期 | 委員 H11.9.1 ~ H23.8.31

桐野 高明

所属・役職 | 東京大学 大学院医学系研究科長
任期 | 委員 H14.9.1 ~ R5.8.31

永井 秀雄

所属・役職 | 茨城県立中央病院 院長
任期 | 委員 H23.9.1 ~ H26.8.31

藤田 裕

所属・役職 | 京都桂病院 整形外科部長・人工関節
研究センター長
任期 | 委員 H23.9.1 ~ R5.8.31

山口 俊晴

所属・役職 | (公財)がん研究会有明病院 副院長
任期 | 委員 H23.9.1 ~ R5.8.31

梶山 美明

所属・役職 | 順天堂大学 教授
任期 | 委員 H26.9.1 ~ H30.10.11

坂本 攝

所属・役職 | 獨協医科大学 教授
任期 | 委員 H28.7.1 ~ R5.8.31

田中 栄

所属・役職 | 東京大学 教授
任期 | 委員 H28.7.1 ~ R5.8.31

田中 真二

所属・役職 | 東京医科歯科大学 教授
任期 | 委員 H28.7.1 ~ R5.8.31

瀬戸 泰之

所属・役職 | 東京大学 教授
任期 | 委員 H30.11.15 ~ R5.8.31

※ 所属・役職…就任時

2

藤田記念医学研究振興基金研究助成を受けて

藤田記念医学研究振興基金研究助成事業 終了への思い

宮島 伸宜 [昭和63年度採択]

| 日本大腸肛門病学会 理事長

主な職歴

- ・ 帝京大学医学部附属溝口病院外科 准教授
- ・ 聖マリアンナ医科大学消化器・一般外科 教授
- ・ 聖マリアンナ医科大学東横病院 病院長
- ・ 恵仁会 松島病院 病院長



藤田記念医学研究振興基金助成事業が令和4年度をもって終了するとの連絡を日本学術振興会から頂戴したのは令和3年12月のことでした。歴史ある事業が終了することは非常に残念なことではありますが、昨今の状況を鑑みると致し方ない部分もあるのかと拝察いたします。

本事業は医学分野のうち、主として外科系医学における研究が対象となっており、若手研究者の研究に対して助成されるものでした。私自身も昭和63年に研究助成をいただきましたが、研究助成金によって研究を支援して下さることは研究者にとっての誇りと幸せであり、いただいたご支援に報いたいとの思いから、研鑽を一層積む機会になったと感じます。ご支援をいただいた研究内容の一部は臨床への応用に繋がり、現在に至る診療の現場においても生きています。私の実体験から、若手の医師に対して研究を続けていくようにというアドバイスを日々送っています。

現在、大変ありがたいことに、病院長や学会長として、様々な団体より研究助成の公募に関するご連絡をいただきます。このようなご連絡に対して、組織として応募に取り組むことができるプラットフォームを形成してまいりました。組織的に応募に取り組むにあたって極めてありがたいのが、助成を受けて実際にどのような研究が行われているかを知ることができる情報公開です。

藤田記念医学研究振興基金助成事業においても、研究概要報告書が日本学術振興会のホームページ

上で公表されています。報告書を拝見していると、いずれも素晴らしい研究であり、今後の医学の発展に直接結びついてくるような研究も数多く、医学界の展望に大きな希望を感じています。

令和元年12月に中国の武漢市で第1例目の新型コロナウイルス感染症が報告されてからわずか数ヶ月の間にパンデミックといわれるほどの世界的な流行となりました。我が国においても令和2年1月15日に最初の感染者が確認されて以降感染が拡大し、現在に至っても収束する気配がありません。感染拡大の当初、各医療機関のスタッフの方々は風評被害に耐え、帰宅もままならない状況の下で懸命に治療に当たってこられました。当初は施設内感染が多くみられましたが、予防策の徹底とワクチン接種の恩恵もあり、施設内での状況は落ち着いてきました。若手の先生方はその先頭に立ってご苦労されたことと思います。心より敬意を表します。

学会も現地開催が困難となりオンラインでの開催が主流となっていますが、気軽に議論ができる場が縮小したことは残念でなりません。新型コロナウイルス感染拡大が収束しましたら、議論の場に積極的に出ていただいて、より一層ご活躍されることを期待しています。

最後に、これまで多くの先生方に対して助成をしていただいた故藤田登先生と藤田記念医学研究振興基金の関係者に対しまして、改めて御礼を申し上げます。

私の研究へのモチベーションを高めてくれた 藤田記念医学研究振興基金

橋爪 誠 [平成2年度採択]

| 北九州古賀病院 院長

主な職歴

- ・九州大学大学院医学研究院先端医療医学部門 部門長 / 災害救急医学分野 教授
- ・九州大学病院先端医工学診療部 部長
- ・九州大学病院救命救急センター センター長
- ・九州大学先端イノベーションセンター センター長



私は当時九州大学第二外科学教室門脈圧亢進症（門亢症）グループに所属し、「肝硬変症合併胃食道静脈瘤血行動態の解明と新たな治療法の開発」を研究テーマとしていました。臨床大学院で第二外科学井口潔先生と第一病理学田中健藏先生に師事し、「肝硬変患者の胃壁の微小循環に関する研究」（Hepatology, 1983）で1984年に博士号を取得致しました。この研究では、剖検例の非門亢症

患者胃壁粘膜筋板直下に認められる「らせん型細動脈」の規則的配列と血流調節機構を可視化することに成功し、門亢症患者ではらせん型構造が弛緩して直線化し、粘膜下層に動静脈吻合が出現することを発見しました。しかし、若輩で日本学術振興会科学研究費に採択されるほどの業績はなく、研究費に困っていた時に、平成2年度藤田記念医学研究振興基金研究助成に採択され、とても喜んだ事を今でも鮮明に覚えています。結果として、門亢症患者では、胃粘膜周囲でプロスタグランジン₂産生が上昇し、胃粘膜血流の増加、脾動静脈の有意な拡張と脾臓流入・流出血流量の増加、固有肝動脈の拡張が認められ、上腹部消化管領域の局所循環亢進状態が示唆されることを報告しました。また、肝硬変症や特発性門脈圧亢進症において認められる脾機能亢進症は脾臓摘出術を施行することで汎血球減少が是正し、肝機能も改善する事を示しました。当時九大では食道静脈瘤硬化療法の有用性を発表していましたが、食道静脈瘤硬化療法と腹腔鏡下脾臓摘出術の併用が、低侵襲でかつ直達手術の食道離断術と同等の効果があることもわかりました。このように、門脈循環亢進状態の機序を病理学的手法と血行動態から解明し、低侵襲でかつより効果的治療法を開発できた事は、望外の喜びでした。

藤田記念医学研究振興基金の採択は、私の研究

内視鏡外科手術患者
(世界初超音波剥離器併用腹腔鏡下脾臓摘出術施行
Hashizume M. et al.: New Eng J Med 1992)

手術前CT: 巨脾例 術後腹部所見

術後1日目に歩行および食事開始、傷が小さく、
痛みが少なく、早期退院、早期社会復帰が可能

図1：超音波剥離器を用いて、腹腔鏡下脾臓摘出術を世界で初めて施行（New Eng J Med, 1992）。左上腹部の直径5mmの切開創3か所から鉗子を挿入し、臍部の直径10mmの切開創から内視鏡を挿入します。最後に臍部の創から脾臓を取り出すので、低侵襲で術後1日目から歩行や食事が可能となります。



図2: 「多元計算解剖学」は、2014年文部科学省科学研究費・新学術領域研究(研究代表者:橋爪)に採択され、国内70研究機関と海外31研究拠面で国際ネットワークを形成。医学部や工学部出身の多くの若い研究者の留学を支援していただき、多くの国際共同研究を実施しました。2021年12月には英語教科書をSpringer Natureより発刊致しました。

への道に希望とモチベーションを与えてくれました。自分の進むべき道を自覚できた事は最高の贈り物であったと心より感謝しております。私は、その後、杉町圭蔵先生のお蔭で、厚生労働省難治性疾患克服研究事業の班長を務めるなど、門元症研究をライフワークとして継続することができました。病態の解明と新しい低侵襲治療法開発への思いはその後も継続し、世界初の腹腔鏡下脾臓摘出術(N Eng J Med, 1992)をはじめとする新たな内視鏡外科手術や、ダビンチを用いた世界初の胃がん手術などを施行させて頂きました(Surg Endosc, 2002)。1999年九大災害救急医学講座初代教授、その後、九大病院先端医工学診療部部長、先端医療イノベーションセンター長、九大病院救命救急センター長、九大多元計算解剖学国際研究開発センター長(新学術領域代表)等を兼任し、2018年に九大を退官致しました。現在は、慢性期療養型病院の北九州古賀病院に勤務しております。



図3: 私が関係したプロジェクトを縦軸にロボット技術、横軸に情報通信技術としてプロットした図です。「いつでも、どこでも、誰もが質の高い医療を受けられる未来医療」を目指して頑張ってきました。現在、「多元計算解剖学に基づいた医療(MCA-based Medicine)の実現」を提唱しています。

若い時に医学研究の面白さと大切さを知る貴重な機会と経験を得たことが、その後も持続して生命科学における真実の探求と医療界への貢献を願う思いを維持することができたと考えております。今は、多元計算解剖学に基づいた医療(MCA-based Medicine)の普及と発展に尽力しております。私は医学の基本は、「人を思う心」にあると考えています。若い方は、是非何事にもチャレンジし、モチベーションを常に高く維持することを心掛けてください。自分の思いを念じ続け、行動を起こすことが、夢を実現する第一歩です。

最後に、人を育てることこそが国の財産です。長きにわたり医学研究を志す日本の若い研究者を支えてこられた藤田登先生と藤田記念医学研究振興基金の関係者に心から感謝し、皆様の更なるご発展を祈念申し上げます。

藤田記念医学研究振興基金による研究成果と その後の展開

—これまでの外科系医学研究者としての歩みと今後の課題について—

阪倉 長平 [平成10年度採択]

| 地方独立行政法人 明石市立市民病院 病院長

主な職歴

- ・ 京都府立医科大学卒
- ・ 京都府立医大大学院医学研究科大学院入学
- ・ 京都大学ウイルス研究所 特別研究生（細胞制御部門）
- ・ 米国ワシントン大学病理学教室（米国 NCI-日本学術振興会癌研究協力事業派遣研究員）
- ・ 京都府立医科大学 第一外科 助手
- ・ 京都府立医科大学大学院医学研究科消化器外科学 准教授
- ・ 明石市立市民病院 病院長



この度は、藤田記念医学研究振興基金研究助成事業終了記念誌に寄稿させていただく機会をいただきまして誠にありがとうございます。これまで本研究基金により数多くの立派な業績が残され、また優れた医学研究者が多数育成されて我が国の医学研究に多大なる貢献をされたこと、そして本研究基金を設立された故藤田 登 先生と関係の皆さまに改めて敬意を表したいと思えます。そして私自身は、米国留学から本学に帰学した34歳時に本研究基金により研究活動を開始し、現在までの25年間、各方面からのご指導・ご支援を頂きながら、17年間母校で教職を務めたのち、平成27年に明石市立市民病院の管理者として赴任して現在で7年が経ちました。そして現在は新型コロナウイルス感染症に対して市内唯一の重点医療機関として、職員一同奮闘しております。

さて本医学研究助成をいただいたきっかけですが、私が助手になった平成8年当時、我が国の臨床系教室で分子生物学の研究環境はまだ多くは整ってはいませんでした。そこで当時の私の上司である京都府立医大第一外科高橋俊雄教授（東北大学昭和34年卒）から、当時の学内で分子遺伝学・

分子生物学研究を最も活発にされていた旧衛生学教室の阿部達生教授（昭和39卒）を紹介していただきまして、日本での研究活動を開始することができました。その研究室（旧衛生学教室）は血液内科出身の先生が中心で、染色体解析（G-banding）、FISH法などを用いた臨床検体での解析を中心に研究をされていました。全員が大学院生や若手の助手であり、昼間は臨床、夕方から夜遅くまで研究という二重の生活でしたが、今から振り返るとこれまでで一番楽しい時期でした。当時の研究テーマですが、UCSFのKallioniemiらにより最初に報告された全染色体のコピー数変化を俯瞰できる comparative genomic hybridization (CGH) 法 (Kallioniemi *et al.*, 1992 Science) を国内で最初に立ち上げることに全メンバーが「全集中？」しており、およそ1年がかりで反応条件の設定を完了し、各種固形癌（胃癌・大腸癌・肝細胞癌・脳腫瘍・頭頸部腫瘍など）の解析がスタートしました。この頃に本研究基金のお世話になりました。その後、数多くの固形癌の病型特異的ゲノム異常を同定しました（文献1, 2, 3）。当時の指導的立場におられた稲澤譲治先生は、活躍の場を東大医科研、さ

らに現在の東京医科歯科大難治疾患研究所に移しつつ、我々との共同研究を継続していただき、新規増幅遺伝子のクローニング等のお仕事に発展・展開されました。

また私の専門は消化器外科ですが、大学院生時代には京大ウイルス研究所で白血病の転座融合遺伝子 (RUNX1) の解析などを行なっていたのですが、その後、その遺伝子ファミリーの1つである胃がんの新しい癌抑制遺伝子 RUNX3 の研究を、当時京大ウイルス研究所所長の伊藤嘉明教授の指導下で、当時としてはまだ珍しかった国際共同研究 (京大ウイルス研、京大消化器内科、京都府立医大消化器外科、東大理学部、韓国ソウル大学薬学部) として行っておりました。その時も衛生学教室時代の FISH 法の技術が非常に役に立ち、すでに東大医科研に転出されていた稲澤先生が準備された RUNX3 (1p36) 用の BAC クローンの感度・特異度が非常に良く、臨床検体での解析が劇的に早くなり、その後、伊藤研からの代表論文の1つとなる Cell 論文 (2002) (文献4) の accept に繋がりました。

そして現在では、病院管理者として研究とは全く異なる仕事をしておりますが、令和2年1月からの新型コロナウイルス感染症の蔓延に対して、市民病院は、あかし保健所・明石市行政・明石市医師会と連携しながら750名以上の入院診療や発熱外来、障害者ワクチン接種などを進めてまいりました。新型コロナの診断にはPCRや抗原検査が多用されていますが、この検査結果の読み方などは、京大ウイルス研に在籍した平成4年頃からPCRを自分で行っていたために検量曲線を見れば陽性か偽陽性かも容易に判断できますので、研究を自分の手でやってきてよかったと感じています。また臨床上のいろんな問題解決能力と基礎研究での試行錯誤はまったく同じであり、研究生活での経験が現在の市中病院の運営やコロナ対応などさまざまなところに役立っています。現在の自分がありますのも、これまで多くの先生方のご指導と薫陶を受けたおかげであると感謝しております。

今後は若手の指導・育成が私の仕事かと考えています。幸い当院には意欲の高い、若手の医師が多数在籍しています。彼らの成長を見守りながら、当院を明石市民の健康・医療・福祉を守るための「地域共生社会」の中核・防波堤にしてゆくのが、私の使命であり藤田先生の御遺志であろうと考えています。

採択課題：平成10年度 日本学術振興会藤田記念
医学研究振興基金

新しい染色体解析法 (CGH 法) を用いた胃癌の染色体異常の解析と遺伝子診断への応用

関連論文

1. Sakakura C, Mori T, Sakabe T, Ariyama Y, Shinomiya T, Date K, Hagiwara A, Yamaguchi T, Takahashi T, Nakamura Y, Abe T, Inazawa J.
Gains, Losses, and Amplifications of Genomic Materials in Primary Gastric Cancers Analyzed by Comparative Genomic Hybridization.
Genes Chromosomes Cancer 24:299-305, 1999. 3.9
2. Sakakura C, Hagiwara A, Taniguchi H, Yamaguchi T, Yamagishi H, Takahashi T, Koyama K, Nakamura Y, Abe T, Inazawa J.
Chromosomal aberrations in human hepatocellular carcinomas associated with hepatitis C virus infection detected by comparative genomic hybridization.
Br J Cancer 80: 2034-2039, 1999. 4.459
3. Aragane H, Sakakura C, Nakanishi M, Yasuoka R, Fujita Y, Taniguchi H, Hagiwara A, Yamaguchi T, Abe T, Inazawa J, Yamagishi H.
Chromosomal aberrations in colorectal cancers and liver metastases analyzed by comparative genomic hybridization
Int J Cancer 94: 623-629, 2001. 4.693
4. Li QL*, Ito K*, Sakakura C*, Fukamachi H*, Inoue K, Chi XZ, Lee KY, Nomura S, Lee CW, Han SB, Kim HM, Kim WJ, Yamamoto H, Yamashita N, Yano T, Ikeda T, Itohara S, Inazawa J, Abe T, Hagiwara A, Yamagishi H, Ooe A, Kaneda A, Sugimura T, Ushijima T, Bae SC, Ito Y (*These authors are equally contributed).
Causal relationship between the loss of RUNX3 expression and gastric cancer.
Cell 109: 113-124, 2002. 29.194

日本学術振興会藤田記念医学研究振興基金の研究助成を頂いて

田中 真二 [平成10年度採択]

| 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 分子腫瘍医学 教授

主な職歴

- ・九州大学医学部卒業，第二外科入局
- ・米国ハーバード大学医学部マサチューセッツ総合病院研究員
- ・九州大学生体防御研究所腫瘍外科助手，医学部第二外科助手
- ・東京医科歯科大学医学部肝胆膵外科准教授，分子腫瘍医学教授
- ・日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員併任

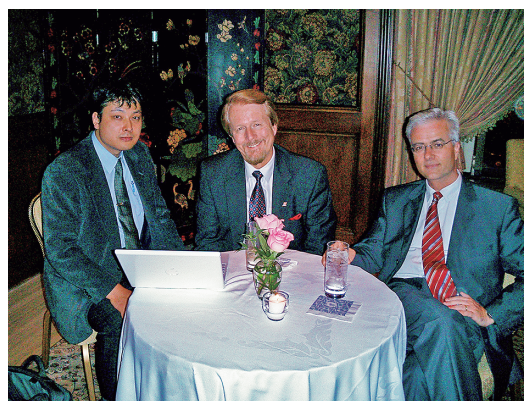


此の度は日本学術振興会藤田記念医学研究振興基金研究助成事業終了に際し寄稿する機会を頂き，誠に有難うございます。小生は，東京医科歯科大学医学部で分子腫瘍医学分野を担当しています。また，東京医科歯科大学病院肝胆膵外科に所属し，手術や外来など臨床に携わっています。1988年九州大学医学部を卒業し，第二外科に入局，大学院では難治性疾患の分子機序を研究するためウイルス学を学び，1994年ハーバード大学医学部マサチューセッツ総合病院へ留学しました。帰国後，生体防御医学研究所腫瘍外科，医学部第二外科（消化器・総合外科），九州がんセンターを経て，2005年東京医科歯科大学肝胆膵・総合外科へ赴任し，2014年分子腫瘍医学教授を拜命して，現在に至っています。2019年より日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員（腫瘍外科学）として，本邦の科学研究全般を支援する業務にも従事しています。

1998年藤田記念医学研究振興基金の研究助成を頂き，外科医としての視点から，臨床に基づいた研究によって新規がん治療法開発への挑戦を始めました。その結果，1,000症例を超える手術検体から28種類の新しい癌関連遺伝子群をクローニングしましたが，新規バイオマーカーとして注目を集めているだけではなく，分子標的治療としての開発が進み既に臨床試験が始まっています。多様性は癌の本質的特徴であり，難治性・治療抵抗性を齎す要因の1つですが，近年のゲノム解析技術等の発展により，各癌腫は様々な分子サブタイプから構成されることが明らかとなり，ゲノム医療への応用が期待されてい

ます。しかしながら，各々の生体内特性には不明な点が多く，十分な治療展開には至っていません。我々は，臨床検体の詳細な解析により各分子サブタイプがそれぞれ異なった腫瘍免疫環境を呈するを見出し，多重ゲノム編集技術を応用してサブタイプ特異的な分子標的治療，免疫治療（CAR-T等）の確立を目指しています。

2006年度第3回日本学術振興会賞を山中伸弥教授らとともに受賞させて頂きました。2016年より日本学術振興会藤田記念医学研究振興基金助成事業委員となり，高久史磨先生の御指導の下，研究助成に携わる貴重な機会を賜り誠に光栄に存じております。藤田登先生，高久史磨先生の御遺志を受け継ぎ，今後とも外科研究と新たな治療開発に邁進する所存です。関係各位の先生方の御高誼に深く感謝致し，益々の御発展を衷心より祈念申し上げます。



藤田研究費による成果の講演後，留学先のボスとの打合せ（米国肝臓学会）

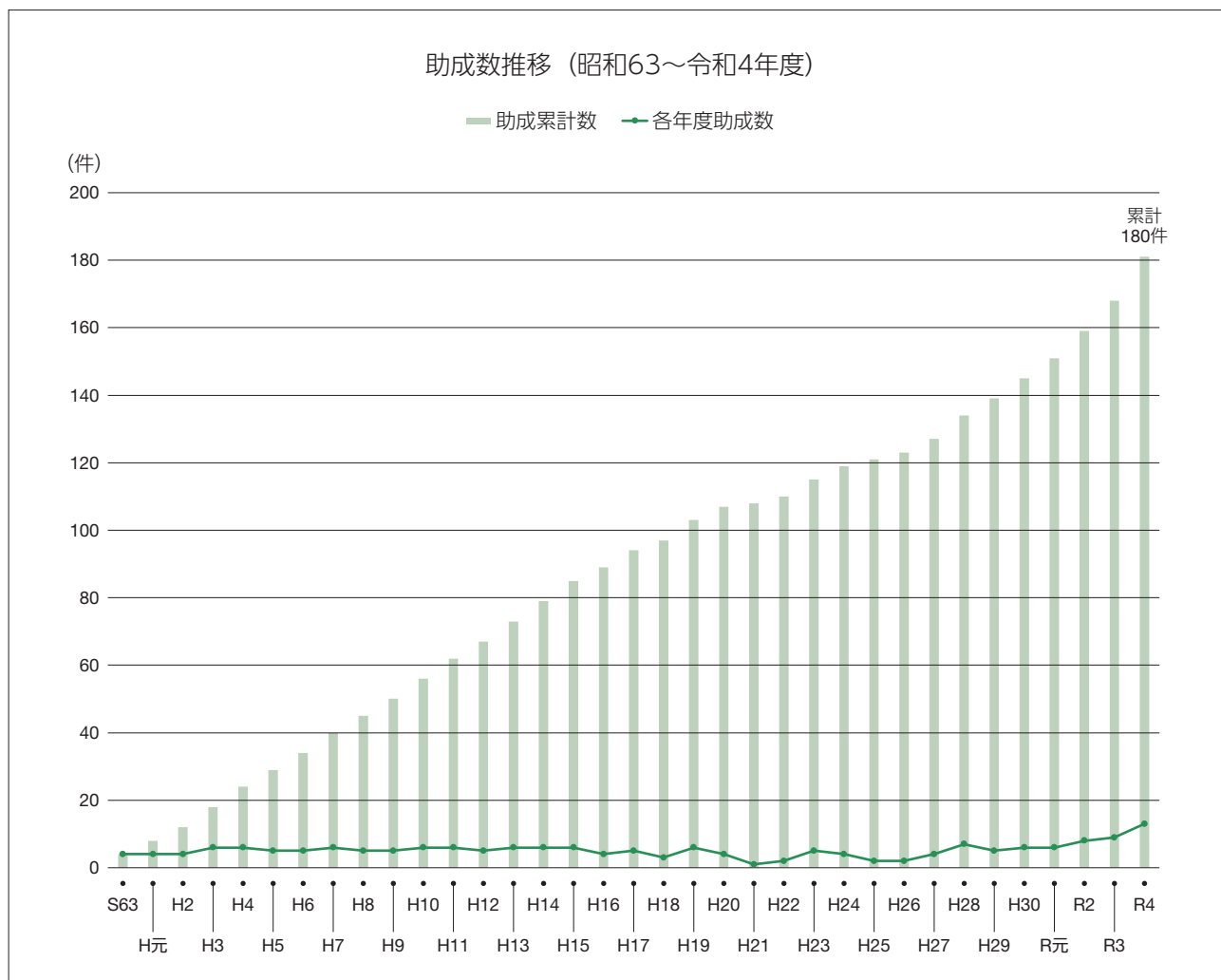
3

藤田記念医学研究振興基金研究助成の実績

藤田記念医学研究振興基金研究助成の実績

■ 藤田記念医学研究振興基金の助成推移

藤田記念医学研究振興基金は昭和 63 (1988) 年度から令和 4 (2022) 年度まで、若手研究者を対象に、医学分野のうち主として外科系医学における研究について 180 件を助成してきた。



■ 藤田記念医学研究振興基金研究助成一覧

昭和 63 (1988) 年度

※所属機関・職は研究助成時点のものです

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|--------|-----------|--|
| 1 | 西野 裕二 | 阪市大・医・助手 | ラット同種胚ラ島移植-培養胚ラ島と抗 Ia モノクローナル抗体処理による生着延長 |
| 2 | 黄金井 康巳 | 北里大・医・講師 | ヒト表皮細胞の短期培養法に関する基礎的研究 |
| 3 | 宮島 伸宜 | 慶大・医・助手 | 陰部神経移植を伴った有茎薄筋弁による外肛門括約筋機能再建に関する基礎的研究 |
| 4 | 楠 正人 | 兵庫医大・医・助手 | 肛門機能温存術式における術後排便機能改善；肛門内括約筋の病態生理における意義 |

平成元 (1989) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------|--|
| 1 | 久保 俊郎 | 東大・医・助手 | 悪性神経膠腫および遺伝性脳腫瘍の病因に関する遺伝子学的解析 |
| 2 | 鎮西 恒雄 | 東大・先端研・助手 | 運動負荷量自動推定による人工心臓拍出量の予測制御 |
| 3 | 長嶋 達也 | 神戸大・医・助手 | 未熟脳における脳血液関門の生理学的特性の解明-小児脳腫瘍に対する化学療法に向けて |
| 4 | 門脇 親房 | 杏林大・医・助手 | 新しいセンサーによる頭蓋内圧モニター法の検討 |

平成 2 (1990) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|------------|------------------------------------|
| 1 | 吉村 了勇 | 京府医大・医・助手 | 肝臓を利用した臓器移植における抗原特異的免疫寛容の誘導に関する研究 |
| 2 | 窪田 正幸 | 愛媛大・医・助手 | 種々の吻合術式後の腸管神経再構築に関する生理学的研究 |
| 3 | 橋爪 誠 | 九大・医・助手 | 間脈圧亢進症における胃食道静脈瘤循環動態の解析と臨床応用に関する研究 |
| 4 | 寺本 研一 | 国立小児病院・研究員 | 移植肝におけるクッパー細胞-その消長と役割- |

平成 3 (1991) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-------------|--|
| 1 | 高安 正和 | 名大・医・助手 | 脳実質内微小動脈灌流法の開発及び本法による血液脳関門の研究 |
| 2 | 寶子丸 稔 | 京大・医・助手 | モヤモヤ病の成因における bFGF のはたす役割の解明 |
| 3 | 真弓 久則 | 九大・医・助手 | 異所性ブタ心臓移植におけるサイクロフォスファミド誘導性免疫寛容 |
| 4 | 塚原 徹也 | 国立循環器病セ・研究員 | クモ膜下出血後の攣縮脳血管におけるエネルギー代謝について |
| 5 | 巽 英介 | 国立循環器病セ・研究員 | 重症心肺不全に対する人工肺組込み補助人工心臓を用いた心肺同時補助に関する研究 |
| 6 | 大谷 肇 | 関西医大・助手 | 心筋再灌流傷害の発生過程におけるカルシウムとフリーラジカルの役割に関する検討 |

平成 4 (1992) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-------------|-----------------------------------|
| 1 | 面川 進 | 秋田大・医・講師 | 手術侵襲を加味した肝障害度評価法の研究 |
| 2 | 鬼塚 正孝 | 筑波大・臨床医系・講師 | 手術侵襲で血中に放出されるエンドセリンの生理的意義の解明 |
| 3 | 是永 大輔 | 九大・医・講師 | 癌の悪性度に宿主の免疫能を加味した胃癌の治療体系の確立に関する研究 |
| 4 | 井上 裕 | 九大・生防医研・助手 | 癌遺伝子の発現を抑制するアンチセンス分子を用いた遺伝子治療の開発 |
| 5 | 谷口 弘毅 | 京都府立医科大・助手 | ポジトロン CT による腹部臓器血流量測定法の開発に関する研究 |
| 6 | 箕島 伸生 | 慶大・医・助手 | ユーイング肉腫発症原因遺伝子のクローニングと機能解析 |

平成 5 (1993) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|--------|-----------|--|
| 1 | 榊原 直樹 | 金沢大・医・助手 | 完全埋め込み型人工心臓の駆動を目的とした骨格筋リニア型アクチュエーターの開発 |
| 2 | 長谷川 光広 | 金沢大・医・助手 | 損傷骨髄における中枢神経の再生促進と神経成長栄養因子に関する基礎的研究 |
| 3 | 寶子丸 稔 | 京大・医・助手 | BDNF 産出細胞移植による、視神経損傷後の神経再生の促進 |

| | | | |
|---|-------|----------|-------------------------|
| 4 | 柏木 史郎 | 山口大・医・助手 | 脳動脈瘤発生における脳動脈壁変化の生化学的研究 |
| 5 | 杉尾 賢二 | 九大・医・助手 | 肺癌における癌関連遺伝子の解析と臨床応用 |

平成 6 (1994) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|--------------|---------------------------------------|
| 1 | 橋倉 泰彦 | 信州大・医・助手 | 生体部分肝移植における術後血栓症予防に関する臨床的研究 |
| 2 | 高階 雅紀 | 阪大・医・助手 | マルチメディアデータベースを用いた教育的指向の手術部業務支援システムの開発 |
| 3 | 金 聲根 | 島根医科大・医・助手 | Nitric Oxide の腎温阻血・再灌流障害におよぼす影響 |
| 4 | 中島 秀彰 | 九大・生防医研・助手 | 癌における反復配列遺伝子（マイクロサテライト）異常の解析とその臨床的意義 |
| 5 | 岩橋 誠 | 和歌山県立医大・医・助手 | 腫瘍細胞障害性 T リンパ球の障害活性増強と大量増殖法の基礎的研究 |

平成 7 (1995) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|--------|-----------|------------------------------------|
| 1 | 富永 悌二 | 東北大・医・助手 | 血管源性脳浮腫における一酸化窒素（NO）の動態解析に関する研究 |
| 2 | 伊達 勲 | 岡山大・医・助手 | カプセル化細胞脳内移植に関する研究－パーキンソン病の治療をめざして－ |
| 3 | 青木 満 | 東女医大・医・助手 | 新生児・乳児の心筋保護 |
| 4 | 木下 良正 | 産医大・医・助手 | 磁気共鳴法による脳細胞膜脂質の微小環境の解析 |
| 5 | 木内 博之 | 東北大・医・助手 | 虚血脳における神経栄養因子の誘導と興奮性細胞障害の相関について |
| 6 | 長谷川 誠紀 | 京大・医・助手 | レーザードップラー法を用いた食道手術前後の気管粘膜血流変化の測定 |

平成 8 (1996) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------|--------------------------------------|
| 1 | 大辻 英吾 | 京府医大・医・助手 | キメラ化モノクローナル抗体の Fab 分画による膀胱癌の治療に関する研究 |
| 2 | 内海 俊明 | 藤田保衛大・講師 | 乳癌組織の aromatase 発現調節に関する基礎的検討 |

| | | | |
|---|-------|-----------|---------------------------------|
| 3 | 鈴木 義久 | 京大・医・助手 | 静脈を動脈化する事による切断組織再接着術の正着メカニズムの解明 |
| 4 | 濱本 勲 | 香川医大・医・助手 | 心停止ドナーまたは生体ドナーからの異所性肝移植に関する研究 |
| 5 | 西崎 隆 | 九大・医・助手 | 部分移植肝容積の許容限界拡大に関する研究 |

平成 9 (1997) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|------------|--|
| 1 | 塩崎 忠彦 | 近畿大・医病院・助手 | ラット延髄における血圧調整中枢の片側性局在の解明 |
| 2 | 藤木 稔 | 大分大・医・講師 | 脊髄損傷の病態解明と新しい治療法 |
| 3 | 稲村 孝紀 | 九大・医病院・助手 | 悪性神経膠腫における DNA ミスマッチ修復異常とアルキル化剤 ACNU 治療効果の検討 |
| 4 | 高橋 潤 | 京大・医病院・助手 | 腫瘍由来増殖因子の阻害による神経膠腫細胞に対する遺伝子治療の実験的研究 |
| 5 | 吉野 一郎 | 産医大・医・助手 | 非小細胞肺癌における HLA-A2/A24 拘束性肺癌抗原の解析 |

平成 10 (1998) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|----------------|---|
| 1 | 鈴木 義久 | 京大・大学院医学研究科・講師 | 動脈血を静脈に流入させることによる切断組織再接着術の生着メカニズムの解明 |
| 2 | 海野 倫明 | 東北大・医・助手 | 肝臓同時切除術後の肝再生制御と肝細胞増殖抑制因子としてのインターロイキン 10 |
| 3 | 掛地 吉弘 | 九大・医・助手 | 胃癌の浸潤・転移における癌細胞と細胞外マトリックスの相互作用に関する研究 |
| 4 | 田中 真二 | 九大・生体防御医学研・助手 | 新しい癌転移規定シグナル分子の同定とその標的制御による癌治療の開発 |
| 5 | 阪倉 長平 | 京都府立医科大・医・助手 | 新しい染色体解析法 (CGH 法) を用いた胃癌の染色体異常の解析と遺伝子診断への応用 |
| 6 | 宮本 正章 | 近大・医・講師 | クラウンミニプタを用いた異種膵島移植における感染症防御システムの開発 |

平成 11 (1999) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------|---------------------------------------|
| 1 | 中尾 直之 | 和歌山医大・助手 | 神経回路網の再建と機能修復を目指した神経栄養因子の遺伝子導入細胞の脳内移植 |

| | | | |
|---|-------|----------------|---------------------------------------|
| 2 | 野村 素弘 | 金沢大・医・助手 | 遊離型 Tie2 受容体遺伝子導入による悪性グリオーマにおける血管新生抑制 |
| 3 | 森岡 基浩 | 熊本大・医学部附属病院・助手 | アポリポ蛋白 E を用いた虚血性神経細胞障害の治療 |
| 4 | 高橋 淳 | 京大・医・助手 | ヒト胎児由来神経系幹細胞の分離・培養とその解析 |
| 5 | 駒井 宏好 | 和歌山医大・助手 | 小児開心術における血管内皮細胞障害の予防：白血球接着分子抑制因子の臨床応用 |
| 6 | 安達 直人 | 山口大・医・助手 | 脳腫瘍遺伝子治療における血管脳関門制御遺伝子導入法の確立 |

平成 12 (2000) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------|---|
| 1 | 内山 明彦 | 九大・医病・助手 | 腹膜中皮細胞を用いた ex vivo 体腔内遺伝子導入法による腹膜播種の制御 |
| 2 | 谷口 英樹 | 筑波大・臨医・講師 | 肝臓における幹細胞システムの解明とその「臓器再生治療」への応用 |
| 3 | 渡辺 真純 | 慶應大・医・助手 | 人工酸素運搬体を用いた腫瘍細胞酸素化による抗癌剤感受性増強に関する実験的研究 |
| 4 | 回 愛民 | 東大・医病・助手 | B 型肝炎ウイルスと C 型肝炎ウイルスに起因する肝癌における G1 期制御因子異常の比較 |
| 5 | 下山 省二 | 東大・医病・助手 | 胃癌・大腸癌におけるアンギオゲニンの発現の検討と癌の診断治療への応用 |

平成 13 (2001) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|------------|-------------------------------------|
| 1 | 窪田 博 | 東大・医病・講師 | 心拍動下、胸腔鏡を用いた心房細動の外科治療 |
| 2 | 永廣 格 | 岡山大・医病・助手 | 消化管を利用した呼吸補助の研究：液体換気と VEGF 遺伝子の有効性 |
| 3 | 板東 徹 | 京大・医病・助手 | 緑茶由来ポリフェノールを含む新しい肺保存液の開発 |
| 4 | 戸田 正博 | 慶應大・医・助手 | 患者血清を用いた SEREX 法による脳腫瘍特異抗原遺伝子の単離の試み |
| 5 | 本望 修 | 札幌医科大・医・講師 | ヒト神経幹細胞の移植による中枢神経系疾患の機能回復 |
| 6 | 遊道 和雄 | 富山医薬・医・助手 | テロメラゼ関連遺伝子導入による骨芽細胞寿命の延長と骨粗鬆症治療への応用 |

平成 14 (2002) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|----------------------------|--|
| 1 | 磯山 隆 | 東京大学・大学院医学系研究科生体工学講座・講師 | 体外循環非使用冠動脈バイパス術用超小型血液ポンプ付き冠灌流カテーテルの開発 |
| 2 | 大平 猛 | 自治医科大学・医学部・助手 | 消化器癌における急速変換磁場による磁化腫瘍細胞のアポトーシス誘導療法の確立 |
| 3 | 小村 伸朗 | 東京慈恵会医科大学・医学部・講師 | Barrett 食道の実験モデルの確立とその形成過程に関する病態生理学的検討 |
| 4 | 島田 順一 | 京都府立医科大学・医学部・助手 | 磁場誘導方式による内視鏡手術用腫瘍位置探査システムの開発 |
| 5 | 丸田 福門 | 信州大学医学部附属病院・助手 | ピロリ菌感染と除菌による胃発癌過程の変化と胃粘膜宿主反応の解析 |
| 6 | 渡辺 昌則 | 日本医科大学・付属第2病院消化器病センター・医員助手 | mRNA レベルでの線維芽細胞増殖因子阻害による大腸癌増殖制御の可能性 |

平成 15 (2003) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------------|---|
| 1 | 栗田 浩樹 | 杏林大学・医学部・助手 | 一回大量照射によるオリゴデンドログリアのアポトーシスに関する研究 |
| 2 | 登坂 雅彦 | 群馬大学・医学部・助手 | 脳血管攣縮におけるリゾスフィンゴ脂質受容体を介したシグナル伝達機構の役割 |
| 3 | 田仲 和宏 | 九州大学・医学部附属病院・助手 | マイクロアレイを用いた Ewing 肉腫のがん化機構の解析 |
| 4 | 常塚 宣男 | 金沢大学・医学部附属病院・助手 | 肺移植後慢性拒絶反応における MT1-MMP 遺伝子発現とその抑制効果 |
| 5 | 宮本 敬 | 岐阜大学・医学部附属病院・助手 | ヴァーチャルリアリティーを用いた高齢者のリハビリテーションシステムの開発 |
| 6 | 森友 寿夫 | 大阪大学・医学系研究科・助手 | 骨・関節疾患に対する次世代画像検査としての3次元動態MRI 運動解析システムの開発 |

平成 16 (2004) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------------------|---|
| 1 | 丸田 福門 | 信州大学・医学部附属病院・助手 | 癌性腹膜炎に対する遺伝子治療法の開発－生体外バイオパレニング法を用いて－ |
| 2 | 佐々木 淳 | 大分医科大学・医学部腫瘍病態制御講座・助手 | 固形がんに対する樹状細胞免疫治療と IL-12 遺伝子治療の併用療法の確立 |
| 3 | 細谷 好則 | 自治医科大学・外科学消化器一般外科・講師 | 胃癌における MSI と hMLH1 遺伝子のメチル化およびプロモータ領域の多型の解析 |

| | | | |
|---|-------|-----------------|---------------------|
| 4 | 川岸 直樹 | 東北大学・医学部附属病院・助手 | 血液型不適合移植における拒絶反応の解析 |
|---|-------|-----------------|---------------------|

平成 17 (2005) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-------------------------------|---|
| 1 | 泉 陽太郎 | 慶應義塾大学・医学部外科学教室 (呼吸器)・助手 | 人工酸素運搬体と抗血管新生治療を組み合わせた固形癌の酸素化と遺伝子発現変化 |
| 2 | 今井 英明 | 群馬大学・医学部附属病院・助手 | 自家細胞移植によるラクナ脳梗塞治療法の開発 - 神経軸索伸長を目指して - |
| 3 | 林 基弘 | 東京女子医科大学・医学部・大学院先端生命医科学研究所・助手 | Radiosurgery による中枢神経系への新たな刺激性作用の解明と臨床応用 |
| 4 | 國定 俊之 | 岡山大学・医学部・歯学部附属病院・助手 | 放射光を用いた新しい整形外科画像診断法：暗視野法による軟骨の画像化の研究 |
| 5 | 森原 徹 | 京都府立医科大学・大学院医学研究科・助手 | RNA interference 法を用いた関節疾患に対する新たな治療法の開発 |

平成 18 (2006) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|----------------------|--------------------------------|
| 1 | 上原 範久 | 関西医科大学・病理学第 2 講座・助手 | 経産後乳腺における発癌刺激応答と癌抑制機構の分子生物学的解明 |
| 2 | 井上 靖浩 | 三重大学・医学部附属病院消化管外科・助手 | 直腸癌に対する術前放射線療法の最適化の検討 |
| 3 | 奥山 隆 | 獨協医科大学・医学部・助手 | 食道癌の浸潤・転移における CXCR4 の役割 |

平成 19 (2007) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|--------------------------------|---------------------------------------|
| 1 | 白石 泰之 | 東北大学・加齢医学研究所病態計測制御研究分野・助手 | 完全埋込型バイオリボティクス人工心筋の開発 |
| 2 | 宇津木 聡 | 北里大学・医学部脳神経外科・助手 | 5-アミノレブリン酸を用いた中枢神経系腫瘍の摘出と光線療法への臨床応用研究 |
| 3 | 岡崎 賢 | 九州大学・大学院医学研究院・次世代低侵襲治療学・寄附講座教員 | 関節軟骨変性メカニズムの包括的理解を旨とした分子生物学的解析と臨床的評価 |
| 4 | 宮本 健史 | 慶應義塾大学・医学部・講師 | 細胞融合受容体 DC-STAMP による破骨細胞多核化機構の解明 |

| | | | |
|---|-------|------------------------------|--------------------------------------|
| 5 | 李 桃生 | 山口大学大学院医学系研究科・器官病態外科学・助手 | メカニカルストレスが心筋再生に及ぼす影響とその機序の解明 |
| 6 | 相原 英夫 | 神戸大学大学院医学系研究科・脳神経外科学分野・医学研究員 | 高輝度放射光を用いたマイクロビーム全脳照射による新しい脳腫瘍治療法の開発 |

平成 20 (2008) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|----------------------------|---|
| 1 | 長谷川 潔 | 東京大学医学部附属病院・人工臓器・移植外科・助教 | 肝細胞癌に対する肝切除術前の自己 FFP 貯血の臨床応用に関する研究 |
| 2 | 山下 洋市 | 九州大学大学院医学研究院消化器・総合外科学分野・助教 | 肝癌の PIVKA-II を標的とした IL-12 遺伝子導入による DNA ワクチン療法 |
| 3 | 中島 崇裕 | 千葉大学・医学部附属病院・医員 | EBUS-TBNA による生検検体を用いた低侵襲肺がん診断システムの構築 |
| 4 | 白田 実男 | 東京医科大学・外科第 1 講座・講師 | 悪性胸膜中皮腫に対する新たな集学的治療の開発 - ALIMTA と PDT の併用 |

平成 21 (2009) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|------|--------------------|--------------------------|
| 1 | 旭 雄士 | 富山大学・大学院医学薬学研究部・助教 | 穿頭ならびに脳室穿刺シミュレーションモデルの開発 |

平成 22 (2010) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|--------------------|------------------------------------|
| 1 | 平岩 訓彦 | 慶應義塾大学・医学部外科学教室・助教 | 温度感受性ナノ磁性体を用いたセンチネルリンパ節の診断と温熱療法の開発 |
| 2 | 三浦 英和 | 東北大学・加齢医学研究所・助教 | 小児にも適用可能な超小型完全人工心臓の研究開発 |

平成 23 (2011) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|--------------------------|--|
| 1 | 藍原 康雄 | 東京女子医科大学・病院脳神経外科・助教 | 小児脳腫瘍に対する、遺伝学・新悪性度分類の構築 |
| 2 | 中溝 玲 | 九州大学・大学院医学研究院脳神経外科学講座・講師 | 間葉系幹細胞の脳腫瘍病態生理に及ぼす影響の検討 |
| 3 | 檜山 明彦 | 東海大学・医学部医学科外科学系整形外科学・助教 | Wnt/ β -catenin シグナルによる椎間板変性症の病態解明 |

| | | | |
|---|-------|--------------------|--|
| 4 | 筑紫 聡 | 名古屋大学・医学部附属病院・病院助教 | 転移性骨腫瘍に対する CT ガイド下凍結療法による治療効果及び免疫増強の臨床学的検討 |
| 5 | 古松 毅之 | 岡山大学・病院整形外科・助教 | 遺伝子導入による靭帯-骨軟骨接合部 (enthesis) の再生 |

平成 24 (2012) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|---------------------|--|
| 1 | 佐藤 寿彦 | 京都大学・大学院医学研究科・助教 | RFID タグを用いた微小腫瘍位置特定システムの実証研究 |
| 2 | 飯田 拓 | 京都大学・大学院医学研究科・非常勤講師 | 過小脂肪肝グラフト移植におけるスタチン製剤のグラフト機能保護効果の研究 |
| 3 | 滝沢 宏光 | 徳島大学・大学病院・講師 | 肺癌患者に対する CT リンパ管造影と直接遺伝子増幅法によるリンパ節転移診断法の確立 |
| 4 | 高橋 祐介 | 慶應義塾大学・医学部・助教 | 肺特異的遺伝子翻訳阻害モデルを用いた肺気腫の病態解明と治療開発 |

平成 25 (2013) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|---------------|--|
| 1 | 石川 栄一 | 筑波大学・医学医療系・講師 | 悪性脳腫瘍における血管内皮細胞関連分子を標的とした新規治療法の開発 |
| 2 | 設楽 仁 | 群馬大学・医学部・医員 | 頸髄症に対する非侵襲脳刺激法を用いた機能改善とその神経リハビリテーションへの応用 |

平成 26 (2014) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|--------|-------------------------|---------------------------------|
| 1 | 蔵満 薫 | 神戸大学・医学部附属病院・肝胆膵外科・特定助教 | 新たな肝硬度計の開発 |
| 2 | 杉本 誠一郎 | 岡山大学病院・呼吸器外科・助教 | 肺移植後の虚血再灌流障害と移植肺生着障害における制御機構の解明 |

平成 27 (2015) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|-----------------------------|-----------------------------------|
| 1 | 花北 俊哉 | 東京大学・医学部脳神経外科・助教 | 超解像技術による流体解析を用いた脳動静脈奇形の病態解明と臨床応用 |
| 2 | 吉井 俊貴 | 東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科整形外科・助教 | 緻密質、多孔質ポリウレタンを組み合わせた新しい骨欠損補填材料の開発 |

| | | | |
|---|-------|-----------------------------|---------------------------------|
| 3 | 大田 陽一 | 大阪市立大学・大学院医学研究科整形外科学教室・病院講師 | 骨髄内環境における骨形成タンパク（BMP）誘導骨形成技術の開発 |
| 4 | 古松 毅之 | 岡山大学・病院整形外科・助教 | 前十字靭帯－外側半月板複合体の機能解析 |

平成 28 (2016) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|----------------------------|--------------------------------------|
| 1 | 大原 利章 | 岡山大学・大学院医歯薬学総合研究科免疫病理学・助教 | 鉄制御による新規癌幹細胞治療法の開発 |
| 2 | 平塚 孝宏 | 大分大学・医学部附属病院消化器外科・病院特任助教 | 腸内正常細菌叢と手術部位感染原因菌のメタゲノム解析：国際多施設共同研究 |
| 3 | 北原 秀治 | 東京女子医科大学・医学部解剖学・発生生物学講座・助教 | 微小循環系の制御による消化管腫瘍の悪性化阻止への試み |
| 4 | 三瀬 祥弘 | がん研究会がん研有明病院・消化器外科・副医長 | 術中超音波ナビゲーションシステムを用いた肝切除手術の開発 |
| 5 | 山本 正樹 | 高知大学・医学部外科学講座（外科2）・助教 | 血流輝度測定法による術中血流評価技術の開発 |
| 6 | 鈴木 秀海 | 千葉大学・大学院医学研究院呼吸器病態外科学・助教 | 肺移植後の慢性閉塞性細気管支炎の病態解明及び治療法の開発 |
| 7 | 田中 雄悟 | 神戸大学・医学部付属病院呼吸器外科・助教 | 肺大細胞神経内分泌癌における神経内分泌マーカーと抗癌剤感受性に関する研究 |

平成 29 (2017) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|---------------------------|---|
| 1 | 森下 登史 | 福岡大学・医学部脳神経外科・講師 | 光脳機能イメージングを用いた脳深部刺激療法によって誘発される脳可塑性の解明 |
| 2 | 楫野 良知 | 金沢大学・附属病院整形外科・医員 | 独自の抗菌ヨード担持加工技術と CAOS 技術を融合した個別適合型インプラントの開発 |
| 3 | 菊田 一貴 | 慶應義塾大学・医学部整形外科学教室・助教 | 粘液線維肉腫浸潤性関連候補糖タンパク質同定を目指したプロテオーム解析 |
| 4 | 笹川 泰生 | 金沢大学・附属病院 救急部・特任助教 | 中枢神経系悪性リンパ腫における IL-10 産生に関連した免疫寛容の解明と治療法の構築 |
| 5 | 渡邊 宣之 | 公立陶生病院・整形外科部長 リハビリテーション部長 | 股関節疾患に於ける、国際的患者立脚型アウトカムの日本語化への取り組み |

平成 30 (2018) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|--------|---------------------------|--|
| 1 | 小澄 敬祐 | 熊本大学・医学部附属病院・非常勤診療医師 | 食道癌におけるがん代謝・マイクロバイオーム・腫瘍免疫の統合解析 |
| 2 | 八重樫 瑞典 | 岩手医科大学・医学部外科学講座・助教 | 大腸癌 ctDNA に原発巣 heterogeneity が及ぼす影響 |
| 3 | 岩本 哲好 | 京都大学・大学院医学研究科消化管外科学・客員研究員 | 大腸癌における KRAS 遺伝子変異に伴う代謝変化に着目した新規大腸癌治療の開発 |
| 4 | 山下 奈真 | 九州大学・大学院消化器・総合外科・助教 | トリプルネガティブ乳癌における heterogeneity の分子機序解明と新規治療への展開 |
| 5 | 春木 孝一郎 | 東京慈恵会医科大学・外科学講座・助教 | 腹側膵および背側膵由来膵臓癌の腫瘍学的特徴・予後に関する検討 |
| 6 | 一瀬 淳二 | 公益財団法人がん研究会有明病院・呼吸器外科・副医長 | 肺扁平上皮癌と食道癌肺転移の鑑別－FFPE からの発現解析と NGS を用いた確認－ |

令和元 (2019) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|--------|---|--|
| 1 | 平松 亮 | 大阪医科大学・脳神経外科・脳血管内治療科・講師 (准) | 新規葉酸受容体標的ホウ素化合物を用いた BNCT による治療効果向上の試み |
| 2 | 藤田 浩二 | 東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・助教 | 糖尿病によるコネキシンを介した骨脆弱性発症機序の解明 |
| 3 | 和田 佳三 | 徳島大学・病院整形外科・助教 | 骨盤傾斜と寛骨臼骨頭被覆率は発育性股関節形成不全の新たな基準となりうるか？ |
| 4 | 川堀 真人 | 北海道大学・北海道大学病院 脳神経外科・特任講師 | 脊髄損傷におけるスフィンゴリン脂質の神経保護効果の解明 |
| 5 | 赤木 洋二郎 | 九州大学・病院脳神経外科・助教 | 神経膠腫におけるデジタル PCR 法を用いた Liquid biopsy の確立 |
| 6 | 本告 正明 | 地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター・消化器外科・副部長 | 食道癌術前化学療法時の有害事象対策に関するランダム化比較試験 |

令和 2 (2020) 年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|--------------------------|---|
| 1 | 黒井 康博 | 東京女子医科大学・東医療センター・脳神経外科助教 | single-cell RNA sequence を用いた髄膜種の病態に関する研究 |
| 2 | 札幌 博貴 | 大分大学・医学部・助教 | 髄膜腫に対する効率的ながんウイルス療法の確立 |

| | | | |
|---|-------|-------------------------------------|---|
| 3 | 佐俣 文平 | 京都大学・iPS細胞研究所・非常勤研究員 | ホスト脳環境の至適化による多能性幹細胞移植治療の開発促進 |
| 4 | 近藤 夏子 | 京都大学・複合原子力科学研究研究所 粒子線腫瘍学研究センター・助教 | 悪性グリオーマによる BNCT 薬剤の取り込み不良による再発の克服 |
| 5 | 永澤 慧 | 東京大学・大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・特任研究員 | 乳房非浸潤性乳管癌（DCIS）の治療最適化に向けた新規再発リスク因子の検討 |
| 6 | 石川 絃司 | 昭和大学・医学部 整形外科 科学講座・助教 | 脱落乳歯由来幹細胞を用いた細胞治療：整形手術における、骨癒合能に及ぼす影響解明 |
| 7 | 北野 雄希 | 熊本大学・病院・特任助教 | 肝胆膵領域癌におけるがん代謝調節遺伝子の同定と新規治療法の開発 |
| 8 | 天達 俊博 | 社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院・外科主任医員 | クモ膜下出血術後の長期心拍変動リアルタイム解析による遅発性脳虚血発生予測の検討 |

令和3（2021）年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|---|-------|----------------------------------|--|
| 1 | 山村 明寛 | 東北大学・大学病院・助教 | 膵臓におけるオルガノイド培養に基づいた膵機能不全に対する再生医療の構築 |
| 2 | 小山 幸法 | 京都大学・医学部附属病院・助教 | 肝再生における線維芽細胞の役割の解明－肝不全治療の新たなターゲットの可能性 |
| 3 | 飯島 圭哉 | 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター・病院・医員 | 分子遺伝学的解析によるてんかん原性病変の手術転帰の予測 |
| 4 | 荒木 麗博 | 金沢大学・医学系研究科（地域未来医療整形外科学講座）・協力研究員 | 骨肉腫の新規予後マーカー血清エクソソーム miRNA146a-5p の臨床応用 |
| 5 | 下崎 研吾 | 金沢大学・医学系研究科（地域未来医療整形外科学講座）・協力研究員 | 立位 MRI・動態超音波評価を用いた早期変形性膝関節症に対する新しい評価方法の開発 |
| 6 | 濱田 知 | 金沢大学・医学系研究科（地域未来医療整形外科学講座）・協力研究員 | 自家脂肪由来幹細胞と自家海綿骨移植の併用による革新的骨癒合促進技術の開発 |
| 7 | 徳永 竜馬 | 熊本大学・大学院生命科学 研究部・特定研究員 | 大腸癌に対する革新的治療戦略構築を目指した SWI/SNF 複合体変異の有用性の解明 |
| 8 | 辻 正範 | 国立大学法人三重大学・医学部附属病院・助教 | ステント留置に伴う脳動脈瘤内血行力学的変化の多孔質媒体を用いた数値流体力学解析 |
| 9 | 瀧 雄介 | 静岡県立総合病院・医長 | 消化器外科周術期菌血症の原因菌およびカンジダ菌血症、在院死亡の危険因子の検討 |

令和4(2022)年度

| | 氏名 | 所属機関・職(※) | 研究課題 |
|----|--------|--|--|
| 1 | 一ノ瀬 惇也 | 金沢大学・附属病院脳神経外科・医員 | ロメリジンによるグリオーマ幹細胞を標的とした新規治療の臨床応用へ向けた基礎研究 |
| 2 | 下村 治 | 国立大学法人筑波大学・医学医療系・講師 | レクチン-糖鎖反応を応用した光免疫療法との癒合による新規癌治療法の開発 |
| 3 | 岡本 竜弥 | 京都大学・医学部附属病院・助教 | 高精度 HLA シークエンスによる胆道閉鎖症発症メカニズムの解明 |
| 4 | 尾崎 由記範 | 公益財団法人がん研究会・有明病院乳腺内科・副医長 | 乳がん患者における標準治療前後における患者免疫病態のモニタリング研究 |
| 5 | 五十嵐 隆通 | 国立大学法人富山大学・学術研究部医学系・助教 | マイクロ流体チップを用いた末梢血循環癌細胞の捕捉とゲノム医療への応用 |
| 6 | 田島 貴文 | 産業医科大学・医学部・助教 | アルデヒド脱水素酵素 2 遺伝子多型と腱板断裂の関連-基礎から臨床までの総合的解明- |
| 7 | 小川 久貴 | 地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪国際がんセンター・Nitto 核酸創薬共同研究部・主任研究員 | がん微小環境バリアを克服する、核酸併用キメラ抗原受容体 T 細胞療法の開発 |
| 8 | 山尾 幸広 | 京都大学・医学部附属病院・助教 | 側頭葉内言語ネットワークの解明 |
| 9 | 永山 愛子 | 慶應義塾大学・医学部・助教 | 乳癌における CRISPR/Cas9 を用いた CDK4/6 阻害剤の耐性機序解明 |
| 10 | 橋本 将志 | 岡山大学・岡山大学病院・医員 | 長期抗腫瘍免疫を介した術前ウイルス療法と術後補助免疫療法の異時的併用効果の検討 |
| 11 | 山口 敬史 | 社会福祉法人恩賜財団済生会支部 神奈川県済生会横浜市東部病院・救急科・非常勤医師 | 高齢者の腹部緊急手術における術後 ADL 低下の予測モデルの開発 |
| 12 | 中谷 卓史 | 公立昭和病院・整形外科・医長 | 仮想現実 (VR) 環境での整形外科外傷手術シミュレーション技術の新規開発 |

藤田記念医学研究振興基金研究助成事業終了記念誌

令和5年3月発行

発行・編集

独立行政法人日本学術振興会
研究事業部 研究事業課 成果発信係

〒102-0083

東京都千代田区麹町5-3-1 麹町ビジネスセンター7階

電話：03-3263-1738

